

## 歴史から学び、気持ちをあらたに

金武町立嘉芸小学校六年 石川 愛美里

「あの人たち、無事に家に帰れるの？」

ヨーロッパでの戦争の映像を見て、私はそんなことを考えていました。爆撃によって家を失った人がどれほどいるのか。自分の命は助かったとしても、家族が戦場に行っている人たちは、どんな気持ちでいるのか。想像しただけで、胸がしめ付けられる気持ちになりました。

「今の時代に、そして日本に生まれてよかった。」

そんなことを考えたりしました。私の祖父母がまだ幼かったころ、ここ日本で戦争があり、多くの人が亡くなりました。毎年六月の平和学習で、戦争体験者の方の話を聞いたり、本を読んだりして、日本でも悲らかな戦争がおこなわれてたことを私は知っています。ニュースに映し出されている光景が、ここ日本でも見られたという事実がとてもおそろしくなりました。

敗戦を経験し、ゆいいつの被爆国となった日本が、戦争を永久に放棄したことを社会科の学習で学びました。

「こんなこと、言っではいけないかもしれないけれど、負けて良かったんだ。負けたからこそ、平和の大切さを学んだのだ。」

私はそんな風に思いました。ある時、テレビを見てみると、アジアの国の人々が日本に対していい感情をもたず、日本企業に対して嫌がらせをしているニュースを目にしました。

「どうして、そんなことするの？」

私はただただ腹立たしくなりました。よその国をどうしてそんなにも嫌うのか、私には理解できず、不ゆかいな思いだけが心に残りました。

その考えをはずかしいと思う出来事がありました。それは、社会科の時間に歴史に触れた時のことでした。それまで私は、敗戦国である日本をかわいそうと思っていたのです。私の中で、敗戦国イコール被害者という考えができてあがっていたのです。しかし、歴史を学ぶと私が知らなかった事実をたくさん知ることができました。戦時中、アジアの国々に対して日本がどんなことをしたのかを知って、私はおどろきました。まさか、という言葉しか浮かびませんでした。と同事に、どうして日本に対していい感情を持っていないかも理解できたような気がしたのです。

太平洋戦争の終結から今年で七十九年。まだ十一才の私にとっては、それはとてもとても長い年月です。当時のこと、語り継ぐ方が少なくなってきたことも知っています。それほどまでに遠い遠い過去だと私は思っていました。でも、長い年月が経ったとしても忘れられない悲しみや苦しみ、つらさやこわさがあるのだということを、今回のことで私は気付かされました。日本人から被害を受けた人々のいかりは、その子孫にまで受け継がれているのだと思います。私たちが、戦争のおそろしさを学び、平和の尊さを学ぶことと同じように、事実が語り継がれて、その感情が後世まで引き継がれたとしても不思議ではありません。だから私は考えが変わりました。そうした国々の人々に、今の日本の素晴らしさを知ってほしい、感じてほしいと思うようになったのです。武器を捨て、戦争を永久に放棄した平和の国、日本。苦しい歴史を乗り越えたからこそ、どこよりも平和な社会を望み、互いに手を取り合うことを大切にすると、日本。過去のあやまちを忘れず、二度と同じことが行らないようにと自国の責任を果たそうとする国、日本。そのことを世界に発信する第一歩として、私は外国の人たちと積極的に交流していきたいです。人と人はわかり合えるもの。平和は全世界で求めていくべきものだと思っていて、私にできることから始めていこうと今は思っています。